

一通の手紙から

総社市教育委員会教育長

久 山 延 司



「新型コロナウイルスの流行によって、大変なことが多く起こりましたが、その度に様々な対応をしてくださり、本当に感謝しありません。」

昨年の秋、教育委員会に届いた手紙の冒頭の一文である。市内の中学3年生の二人の生徒から送られてきたものだ。手紙は、臨時休校期間のことに始まり、休校中の学習サポート、修学旅行等の校外学習など、学校の先生方が生徒のことを考え、模索しながら検討をしてきた様子がつづられていた。そして、それらに対して教育委員会が、ストップをかけずに見守りながら判断したことへのお礼があり、このことを学校の先生から聞いて、うれしく感じたことなどへと続いた。修学旅行については、「県内ということになってしまいました。普通ではないということが嬉しく、楽しいなと私たちは思っています」と二人の気持ちが表示されていた。

思いがけない手紙に驚くとともに、温かく前向きな生徒の気持ちに触れ、日々、感染予防対策やそれにかかわる教育課題への対応に追われる我々教育委員会職員は、心が癒された。これまで、感染対策という理由で、多くの学校行事や参観日、水泳学習などを中止したり縮小したりせざるを得なかった。判断を

するたびに、子供たちの楽しみや伸びる機会を奪っているように感じ、申し訳ない気持ちを常に持っていた。そういう中でこの生徒たちからの手紙は、「心配しなくても私たちは大丈夫ですよ」と教えてくれているように、安心して、とても勇気づけられた。

二人のうちひとりの生徒は、卒業式で答辞を読んだ。その中で、「私たちには書けなかった物語があったけれど、（文化祭での）家庭コンサートや前夜祭など、今だから書けた物語があります。私たちは失ったのではなく、真新しい物語を書き上げたのです。この物語には、私たちにしか得られなかった何かがあるはず」と語った。

コロナ禍の中で、私たちは、今の子どもはかわいそうだと思ってしまうが、子どもたちは、この状況の中でも、今できることを精いっぱいやる、という気持ちで、しっかりと前を向いて、日々頑張っている。

我々教育に携わる者は、こういう時だからこそ、これまで以上に子どもたちと対話をし、思いを受け止め、共に新しいものを創り出そうとする意識を持つことが大切だ。手紙に添えられていた手作りのコロナポックルの置物を見ながらそう思った。